# ZENFUREN

附属だより　http://www.zenfuren.org/

発　行　所
全国国立大学附属学校連盟
全国国立大学附属学校PTA連合会
〒105-0001 東京都港区虎ノ門
1-2-29 虎ノ門産業ビル8F
全附連事務局
TEL:03-3591-2091
FAX:03-3591-2092
E-mail:jimukyoku@zenfuren.org
印刷:芳武印刷株式会社


## 第110号 LINEUP


あいサポート運動で
鳥取県と全附P連が連携協定

鳥取県・平井知事と

11面

寄稿　知ってほしい附属学校の良さ
ジャーナリスト
斎藤　治氏
（元読売新聞主任研究員）

9面

寄稿　附属学校園の生徒と接して
国立大学法人
信州大学学長
濱田州博氏

11面

附属OB訪問PLUS（文科省・丹呉様、内閣府・髙橋様、財務省・森下様、松本市教育長・赤羽様）……8面
いじめ防止プログラム……11面
第9回全国大会ご案内・カンガルーシップ活動・編集後記…12面

その他の紙面

# 全附P連PTA研修会
# 第8回全国大会を開催

2～4面

## ご挨拶

### 伝統の中で

全国国立大学
附属学校連盟
理事長 丸山 研一
（千葉大学教育学部附属中学校校長）

今年の一月に、宮中での歌会始の陪聴者として参内して参りました。これは国立大学附属学校の校長として招聘を受けたものでした。参加者の中には教育関係の方々もおいでになりましたが、どの方も功成り名を遂げた人物であり、個人としては、和歌への見識も無い一研究者、それも理系分野を専攻する身には起こりえないことでした。

晴天に恵まれた新春に、期せずして雅な一時を過ごす機会をいただきましたが、その時に感じたのは、国立大学附属学校園の存在の際だった特殊性です。そこには明治の師範学校の附属学校、全国の学校の模範としての学校群の姿が今もなお色濃く残っています。

昨今、附属学校園に対する国からの厳しい指摘があり、どの附属学校園でもそれに向けた対応を求められています。国が直接関与する特別な存在であるがゆえに、我々には常に大きな期待が懸けられて来ました。時代の変化を適切に取り入れて、国の教育の発展に寄与して行くことは、当然のこと乍ら強く求められていることです。外部環境が流動化し激変する中において、国立大学の附属学校園は、先に述べたような特別な存在であることに、何かしら慢心した部分はなかったのか、大学と共に今後更に真摯に受け止めて対応して行きたいと思います。

### 「改革」と「周知」

全国国立大学附属学校
ＰＴＡ連合会
会長 呉本 啓郎
（大阪教育大学附属平野小学校）

一年間にわたって開催されてきました文部科学省の「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」も去る8月29日をもって閉会し、報告書がまとめられました。そもそもが「改革に関する有識者会議」ですので、そこでは現在の国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の課題が多く指摘され、議論されてきました。

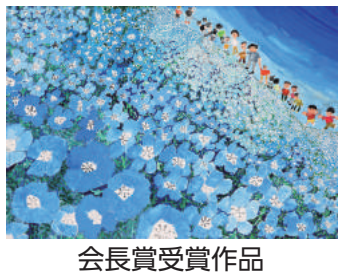
そのような、これから附属学校にとってますます厳しい時代を迎えることになるであろう中で、キーワードとなるのは「改革」と「周知」だと考えています。

文部科学省が47都道府県の教育委員会に対しておこなった最新の調査では、90％以上の教育委員会が附属学校のことを「役に立っている」と考えていることがわかりました。一方、60％以上の教育委員会が附属学校のことを「よく知らない」と答えています。教育委員会でさえそうですから、附属学校に関わりのない世の中の多くの方々には附属学校の持つ社会的使命、果たしている公益性などについて、なおのこと理解されていないのが現実であり、それが世論を構成しています。国の歳出削減や少子化などの要因もありますが、現在の附属学校の危機の原点はここにあると考えています。

附属学校が今の時代に合った改革を進め、国立学校として、さらに公益性を高め、また、より公共的となることと同時に、その存在と役割が「この国の未来のために」いかに重要なものであるかについて世の中の周知を得ることが喫緊の課題であると考え、今後も支援活動を継続してまいります。

今後とも、何卒、ご理解、ご協力とともに、ご指導、ご鞭撻を賜れましたら幸いです。

## ぼくのわたしの笑顔あふれるふるさと自慢
全附P連 絵画コンクール2017


会長賞受賞作品

5～7面

## 全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会 設立

12面

## 第9回 附属OB訪問

茂木健一郎氏
呉本会長
対談

10面

# 全附P連PTA研修会 第8回 全国大会

9月29日(金)～30日(土)
ハイアットリージェンシー東京

開催スローガン

## 子どもたちとこの国の未来のために～附属学校の果たすべき役割とは～

全附P連ＰＴＡ研修会第８回全国大会が、ご来賓や講師の先生を合わせて約1000名の参加者が集い、２日間に渡り盛大に開催されました。また絵画や特別支援記念品の展示や、文科省などのＰＲブース、特別支援関連商品の販売なども行われました。

## オープニングセミナー

### この国の未来のために
～附属学校とPTAが今なすべきこと～

全附Ｐ連鈴木副会長の開会宣言、呉本会長の挨拶の後、井上直前会長の司会で、上記テーマの下、シンポジウムが開催されました。はじめに文部科学省柳澤室長から附属学校を取り巻く現状について説明があり、今後の附属学校の改革に関して「余地」はあるけど「余裕」はないと述べられ、次に全附連を代表して有識者会議のメンバーを務められた田中事務局長が、その所感と今後の附属学校への思いについて話されました。これを受けて全附連盟丸山理事長が、千葉大学附属学校での取組を紹介され、20年も前にＨＰやＥメールを作り、その時得た知見を公立に発信したこと、附属学校の役割を外部へ宣伝発信することが大学や全附連の仕事であると述べられました。最後に呉本会長が、今まで附属学校は「公益性」は高いが「公共性」が足りなかった。今後はスケールメリットを生かしたＰＴＡの取り組みを行い、「改革」と「周知」をしっかりと行っていきたいと述べられました。

その後、財務省上田課長補佐から「財政教育プログラムについて」、文部科学省吉谷係長から「改正個人情報保護法について」、最後に内閣府相川参事官から「子どもの貧困対策の取り組みについて」の説明がありました。（竹川裕之）

### いかにいじめ問題に対応すべきか

基調講演１

鳴門教育大学　大学院　高度学校教育実践専攻　地域連携センター　所長
**阪根　健二 氏**

いじめ問題の課題はネット時代になり、間違った情報に対する対応の仕方が分からず、自分の事として捉えられなくなっていることだそうです。

学校の現場でも過去の常識にとらわれ、いじめが見過ごされています。そこでいじめに対する意識を統一するために【いじめ防止対策推進法】が制定され、「いじめ」が定義されました。①両者が児童、生徒である　②一定の人間関係がある　③心理的、物理的な影響を与えている　④心身の苦痛を感じている　これら４つの要素があれば全て「いじめ」と認定しなければならないことになりました。それにより先ずは「法律上」と「社会通念上」のいじめのギャップを埋めることからスタート。さらに良い聴き手となり、「いじめられる側に立つことで初めて中立になる」ということを先ず我々大人が理解しいじめ問題に正面から向き合わなければならないと痛感いたしました。（鈴木信雅）

### いじめに対する文部科学省の思い

基調講演２

文部科学省　初等中等教育局
児童生徒課長
**坪田　知広 様**

過去に学校や教師が周りの評価を意識し、いじめを隠し抱え込むことで悲劇が起こる事案が多く見られたそうです。文部科学省ではそうした問題を防ぐ後押しをしようと、【いじめ防止対策推進法】を制定しました。その結果いじめの件数は増加していますが、これは積極的にいじめを認知していることの表れであり、肯定的に評価しているそうです。「いじめはあって当然という意識をもち認知０（いじめ０）の学校をなくしていきたい」と、子どもを守るために国を挙げいじめ問題に取り組んでいく強い思いを感じるお話でした。
（鈴木信雅）

## 分科会1

### 養護教諭・保健室からみた子どもたちの健康課題・健康格差

分科会1は、健康教育、養護教育を専門とする東京学芸大学、芸術・スポーツ科学系養護教育講座教授の竹鼻ゆかり先生をお迎えし、参加型、問題解決型学習方法である「ケースメソッド教育」によって、子どもの健康課題や解決方法について理解を深めました。それぞれの事例についてテーブル討議や、発表を通して先生との意見交換も行いました。

竹鼻先生からは、「体→生活→心」という順番で子どもを見る事が大事だとアドバイスをいただき、「心」を初めに考え過ぎる事で、対処の遅れに繋がる事に気付かされました。

子どもたちは様々な形で自分を発信している事を知り、新たな視点を持ち帰る事が出来た有意義な分科会となりました。
（大竹昌士）

## 分科会2

### スマートフォン普及をふまえた新しいネットいじめ対策

分科会２では、大きな社会的問題となっている「ネットいじめ対策」がテーマで、スマホによるネットいじめを研究されている千葉大学教育学部の藤川大祐教授とＬＩＮＥ㈱の江口清貴氏が講師となり、研究者側からの「現状と課題」そして事業者側からの「取り組み」についてご講演頂きました。

その後、藤川教授が座長となり、文部科学省の坪田知広氏とＬＩＮＥ㈱の江口氏そしてＳＴＯＰｉｔ（いじめ匿名通報システム）のストップイットジャパン㈱の谷山大三郎氏がコメンテーターとなり、参加者各班での討議と発表・質問を受けて、トークセッションを行い、ネットいじめ対策が活発に議論され有意義な分科会となりました。
（板倉雄一郎）

## 分科会3

### きらめく個性は宝物 子どもが輝くインクルーシブ教育
～わが子を理解し最良のサポーターであるために～

分科会３は、講師として國學院大學人間開発学部教授・臨床発達心理士で、前筑波大学附属大塚特別支援学校副校長の髙橋幸子先生をお迎えし、「インクルーシブ教育とは？」のご講演をいただいた後、参加者同士に、「あ」だけで会話をする（伝えたいが伝わらない）体験、ワーキングメモリー体験、読字困難体験、感性特性チェック等の障害疑似体験を体験いただき、その後「わが子を通してインクルーシブ教育を考える」というテーマでグループ討議と発表をしていただくという内容でした。

障害者の感覚を実感し、それを個性としてとらえる「みんな違ってみんないい」というインクルーシブ社会の考え方を学ぶことができ、さらにはわが子の個性と親としての接し方まで再考できた、内容充実の分科会となりました。
（三浦　享）

## 特別支援部会

# 特別支援学校・学級ならではの課題を共有し、解決の糸口を探す

本分科会では、筑波大学附属大塚特別支援学校長の柘植政義先生の『インクルーシブな教育や社会に向けて～保護者と教師へのエール～』のご講演後、グループディスカッションで各テーブルへ助言者7名6組が巡回、多様な切り口で話し合いました。障害、教育、そして保護者の覚悟など、具体例を話し合うには時間不足の感があったものの、『合理的配慮と本人の意思決定を尊重する姿勢が大切』『保護者が待っているのではなく動かなければ！そして子どもが一番と考え、行動すべき』と言う意識を、参加者に持って帰ってもらえたと感じました。（雪岡雅）

## 教育後援会会長会

# 教育後援会が抱える課題と、設立予定の全国組織に期待される活動とは

午前中に教育後援会連絡協議会の設立総会が開催されたこともあり、今年は例年以上の参加者でした。はじめに全附P連で実施した教育後援会に関するアンケート結果について、組織構成、年間収入などの報告がありました。その後、文部科学省教員養成企画室の福島哉史室長補佐より有識者会議についての解説をしていただき、フリーディスカッションで当面の課題について話し合いました。また、寄付金控除についての議論も行われ、先進的な取組みをしている事例の報告があり、参加者にとっても大変参考になる情報になったと思います。（神余智夫）

## あいサポート運動

情報交換会に先立ち、同会場で開催されました。（＊詳細は11面へ）

鳥取県知事代理　障がい福祉課長　小澤様と

**鳥取県と全附Ｐ連の連携協定の調印式 開催！**

## 情報交換会

# 各界に広がる附属の輪

第1日目夕刻より情報交換会が行われました。約70台の円卓が広がる会場の景色は壮観であり、大会の隆盛を物語ります。文科省など関係省庁、講師の先生やマスコミ関係者他、各界から80名以上を来賓としてお迎えし、全国から集った附属の保護者や先生方が和やかな雰囲気の中、お互いに交流を深めあった2時間でした。（毛利雅哉）

**第１日　9月29日(金)**

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1日目 | 11:30 12:20 | | 13:50 14:10 | | 15:25 16:00 | | 17:35 18:00 | | 20:00 |
| プログラム | 受付 | 開会行事・オープニングセミナー | 休憩 | 基調講演<br>阪根 健二教授<br>（鳴戸教育大学大学院）<br>いじめ問題にどう対応すべきか | 休憩 | テーマ別分科会１～３<br>特別支援部会<br>教育後援会会長会 | 休憩 | 「あいサポート運動」連携協定の調印式<br>情報交換会 | |
| 絵画コンクール入賞作品展示／特別支援記念品展示／ＰＲブース／販売ブース | | | | | | | | | |

**第２日　9月30日(土)**

| | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2日目 | 8:30 9:15 | | 10:30 10:55 | | 12:45 | |
| プログラム | 受付 | 本講演<br>井村 雅代氏<br>（井村シンクロクラブ　代表理事）<br>人を育てる～愛があるなら叱りなさい～ | 休憩 | クロージングセミナー・座談会<br>中村 克樹教授<br>（京都大学霊長類研究所）<br>生活習慣と成績の関係<br>～食べることや寝ることの大切さ～ | | |
| 絵画コンクール入賞作品展示／特別支援記念品展示／ＰＲブース／販売ブース | | | | | | |

## 本講演

**井村雅代 氏**

**一般社団法人　井村シンクロクラブ　代表理事**

# 人を育てる

## ～愛があるなら叱りなさい～

大会2日目最初のプログラムとして、井村雅代さんの本講演が開催されました。

井村ヘッドコーチが以前日本代表の指導をなさっていた時は、日本のシンクロチームは表彰台の常連でした。他国で指導をなさるようになってからも井村ヘッドコーチはそれらの国全てにメダルをもたらしました。この事実から、指導者で選手は変わるということがわかります。シンクロというスポーツを通じて「よき人間を作りあげる」というご講演をしていただきました。

お話を聞いてまず感じたのは、「選手（子ども）を観察する」ことが大事だということです。２０１４年に日本代表のヘッドコーチに復帰されたときに、「昔」と「今」の子どもたちは全然違うと感じたとのことでした。言葉の真意が伝わらない、言葉の意味をはき違える。じゃあどうしたらいいのか？実際にやってみることです。ロッカーの整理整頓をしましょう、と言っても改善されない。じゃあ実際に練習中にコーチ自らがロッカーの片づけを行います。それを見た選手たちは、ここまでしないと片づけにはならないのか、と気付きます。そこまできちんと教える込むいうことが大事なのです。

そして全力を尽くすということです。本当に悔しい思いをしたことがない。うれしい思いをしたことがない。達成感を味わったことがない。それらを感じさせるために徹底した練習をさせる。選手の技術、体力、精神力を発揮させるためです。メディアで映し出される井村ヘッドコーチの姿はここだと思います。しかし、コーチも全力を尽くしているのです。オリンピックの曲作りから、衣装の仕上げに選手のお母さんにお手伝いいただくということまで。オリンピックの作品をみんなで共有できるために。このお話を聞いたあと会場で上映されたリオオリンピックでの選手たちの演技、感動しました。最高の演技のあと、選手たちと抱き合う井村コーチを見て涙で溢れました。会場中が感動の涙に包まれました。

最後にこんな名言を頂きました。

「一流は道を作る　二流は道を選ぶ　三流は道に流される」

子どもたちの成長が見られるのが楽しいと仰っていました。我々も子どもたちをきちんと観察し、全力を尽くして子どもたちの成長を感じていきたいと思います。

（谷田部秀男）

第８回全国大会

# クロージングセミナー

## ●講演　●座談会

本全国大会の最後のプログラムとして、クロージングセミナーが、「講演」と「座談会」という２部構成で開催されました。

まず「講演」では、中村克樹先生に『生活習慣と成績の関係』～食べることや寝ることの大切さ～と題してお話しを頂き、生活習慣が子どもの学力に大きく影響している報告があげられました。学力には日常の勉強時間とは別に、遺伝や親の年収が大きく影響しているが、環境や生活習慣はそれ以上に影響していること、睡眠と食事の２つは、脳の発達や体力をつけるために非常に重要な要因となっていることなど、生活習慣や環境がいかに大切かを、中村先生のデータや報告事例の解説で知ることができました。子どもたちの生活習慣を見直すのはもちろん、私たち保護者の意識改革にもなる貴重なお話しを頂きました。

### 食べることや寝ることの大切さ

### 生活習慣と成績の関係

京都大学霊長類研究所
教授　**中村　克樹** 氏

引き続き「座談会」が『子どもたちとこの国の未来のために～保護者として、国立学校として～』というテーマで開催され、中村先生にもご参加いただきました。座長は全附Ｐ連の呉本会長が、メンバーとしては文部科学省の柳澤室長、東京学芸大学副学長の松田先生、全附連盟の丸山理事長、そして中村先生という豪華な顔ぶれで行われました。

まず座長の呉本会長より、講演にあった生活習慣の影響について、最新の脳科学についてなど、テーマに沿った内容の発信がありました。その後、夜はしっかり寝かせて朝ご飯を一品でも多く取らせるよう保護者が指導することが大切で、子どもの能力を１００％引き出すように育てるためには、親や周りの人が環境を整えることが必要である、との意見がでる一方、学校側からみると日々悩んでいて、附属という特性で遠方から通学する子どもがいるため時間が無く、朝ご飯を食べずに登校する子どもがいるなど朝食を取らないのが生活のスタイルになって来ている、といった多方面からの意見を聞く事が出来ました。

また「脳」に関しては、環境の変化を捉える事が大切であり、興味のある対象に非常に集中するのは成長の過程で獲得していくべき大事な事である、といった学校の先生、脳科学の先生としての可能性としての見解を聞く事ができました。多方面の立場の方々からの意見を、座長がうまく引き出しながらの進行となり、分かりやすく大変意義あるクロージングセミナーとなりました。

最後に、全附Ｐ連の小塚研修担当副会長より大会宣言がなされ、平岡研修委員長の閉会宣言で、２日間に渡った全附Ｐ連ＰＴＡ研修会第８回全国大会が閉会されました。

（萩原清明）

座談会の様子

## 展示コーナー／ＰＲブース／販売ブース

### 展　示

- **絵画コンクール入賞作品**
- **特別支援記念品**

### ＰＲブース

- **文部科学省初等中等教育局児童生徒課**
  ～いじめ対策について～
- **文部科学省初等中等教育局特別支援教育課**
  ～特別支援教育の推進～
- **文部科学省生涯学習政策局社会教育課**
  ～土曜学習応援団～
- **文部科学省初等中等教育局国際教育課**
  ～官民協働海外留学創出プロジェクト「トビタテ！留学ＪＡＰＡＮ日本代表プログラム」
- **内閣府子供の貧困対策推進室**
  ～夢を貧困につぶさせない～
- **財務省**～財政教育プログラム～
- **カンガルー保険**

### 販売ブース

- **工房わかぎりレザークラフト製品**
  （「工房わかぎり」は筑波大学附属大塚特別支援学校の親の会を母体にした作業所）
- **あけぼの園おおぞら園菓子製品など**
  （千葉大学教育学部附属特別支援学校卒業生の製品）
- **〝hocco sweets〟クッキー**
  （「高知発達障害研究PJ」により高知大学教育学部附属特別支援学校内に設立）

- **全附連関連製品**（待望のムック本「国立大学附属学校のすべて」、「この国の未来のために～附属学校の魅力と存在意義」、全附連ピンバッジなど）

## 大会宣言

文部科学省の「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」の報告書が先月末にとりまとめられた。報告書では、わが国の少子化の進行とともに教員需要の減少期が到来する一方で、教員としての専門性の高度化が求められる今日、わが国の教員養成の中心的な役割を果たすべき国立教員養成大学・学部等が、限られた資源の中で、エビデンスに基づいて教員養成機能を着実に高め、わが国の学校教育全体の質の向上をリードすることを改革の目的に、教員養成機能の強化に加えて公立私立とは異なる国立大学附属学校としての存在意義・役割・特色の明確化が求められている。

こうした現状を踏まえ、「子どもたちとこの国の未来のために～附属学校の果たすべき役割とは～」をスローガンに掲げ、ここハイアットリージェンシー東京にて全附Ｐ連ＰＴＡ研修会第８回全国大会を開催した。今大会では、各省庁、関係諸団体とも連携し、平素より当会が取り組む〝いじめ対策〟、〝子どもの貧困問題〟、〝インクルーシブ〟、特別支援学校・学級や教育後援会が抱える今日的な課題等についてのプログラムを組み、参加者が共に学ぶとともに、これまでの教育学的な経験値に最新の脳科学の知見を加え、保護者としてなすべきことを再確認し、また、附属学校の新たな可能性についても考察した。

当会では、子どもたちとこの国の未来のために、附属学校の発展、日本の公教育の振興に寄与することを目的として、今後もＰＴＡ活動の実践と研鑽を推進する。附属学校の持つ独自性や創造性、社会的使命、存在意義などの公益性や公共性を、それぞれの地域社会および全国的に発信することにより、広く世の中の理解と支援が得られるよう積極的な活動を展開することをここに宣言する。

平成29年９月30日

# 全附P連 絵画コンクール2017

今年も絵画コンクールが「ぼくのわたしの笑顔あふれるふるさと自慢」をテーマに開催されました。主管校の上越教育大学附属小学校で9月16日に行われた審査会では、過去最多の102校園2901作品から120点の入賞作品が選出されました。

## 過去最多2901作品の応募！

## 絵に込められた子どもたちのふるさと

## 主管校所感

PTA会長　大塚　忍

今年度、絵画コンクールの主管校を務めさせていただきました。子どもたちは、いずれ進学・就職等でこのふるさとを離れる時が来るでしょう。そんな時離れた地で、ふとした瞬間に「ふるさとを思い出すきっかけになって欲しい」と思い、今回のテーマを「ぼくのわたしの笑顔あふれるふるさと自慢」に選定しました。子どもたちの絵には、ふるさとの様子が伸び伸びと描かれており、正に自慢のふるさとを主張する作品ばかりでした。私たち親は、子どもたちの為にも今のふるさとを守り、子どもたちの世代へと引き継ぐ責任を感じました。

今回、過去最高となる2、901点もの作品を全国の附属学校の多くの子どもたちから出展していただいた事に、心から感謝を申し上げます。

## 主管校紹介

## 上越教育大学附属小学校

上越教育大学附属小学校は、1902年に開校した新潟県高田師範学校附属小学校を前身とし、2004年に現在の校名となりました。児童数は1クラス35人で、学年2クラス編制。2014年から文部科学大臣による研究開発学校の指定にともない、教育課程開発研究を行っており、独自の教育課程を編制しています。

「創造活動」「実践道徳」「実践教科活動」「集団活動」の4つを軸に教育活動を実施しています。1～6年生まで通して行われる「創造活動」では、低学年は校地内で羊やヤギ、ポニーやアルパカといった動物を飼育したり、中学年では里山でのフィールドワークを年間20回近く行ったりしています。高学年になると映画を制作したり、匠と出会い制作活動を行ったりと多岐にわたる活動にチャレンジしています。さらに、この活動は学年単位ではなく、クラスごとに異なっているのも教育活動の特色です。

## 審査員講評

上越教育大学大学院　教授
松本健義

### 経験とつながり

幼・小・中・高，特別支援学校の約2900点のどの絵も，子どもたちが身体で感じ経験した「笑顔あふれるふるさと」の感動と喜びに溢れていました。絵をとおして，その地域特有の降り注ぐ光や風，場や季節の匂いさえも経験できました。蜜柑や黒酢など特産物の生産に精を出す家族の姿，一面を埋め尽くして咲き誇る花，田植えを終え吹き抜ける風にそよぐ水田，海峡大橋を自転車で疾走する自分など，ふるさとへの細やかなまなざしと優しくやわらかな感性が伝わってきました。父母の郷里で祖父母と森や海へ出かけて虫や魚を採る絵からは，世代を超えたつながりの中で，のびやかな成長を支え見守る保護者の姿が，ふるさと自慢として絵に表現されているようで，心温まり嬉しく感じました。附属学校の教育をいつも支えて下さっている保護者の皆様の広く深い思いがこもった絵画コンクールでした。

上越教育大学　准教授
松尾大介

### 届けられた風や香り

この度、「絵画コンクール2017」の審査を担当させていただきました。今回、全国から応募された2901点もの絵は、いずれも純粋な思いが込められた力作でした。「笑顔あふれるふるさと」をテーマとした一枚一枚の絵には、子どもたちの日常がありありと感じられ、その土地に降り注ぐ光、そして香りや風までも届けられたようでした。審査会場となった体育館が、そのような香りと風に満たされた幸せな空間となりました。

個性的な表現の魅力は、手際よく上手に描かれた絵よりも、白い画面に一つの色、一つの線を重ねながら、描きたい人や風景への思いを深めていく過程にこそ込められていきます。審査を通じて、そのことを強く実感し、改めて子どもたちに伝えたていきたいと思いました。

来年度も新しいテーマのもと、色とりどりの子どもたちの素直な思いが、数多く届けられることを望みます。

上越教育大学附属小学校　教諭
黒岩昭伸

### 子どもが見る「ふるさと」

「ふるさと」とは、単に生まれ育った場所を意味するのではなく、その地の文化、家族の温かさ、出会った生き物、美味しい食べ物など、子どもが身体を通して感じているものすべてが含まれていることを、子どもたちの絵からあらためて教えられました。家族で訪れた池のわき水でタオルを冷やし、おじいちゃんの首にタオルをあててあげた子どもの絵からは、池の美しさだけでなく、そこに住む白鷺や一緒に訪れた家族が生き生きと描かれていました。まさに「笑顔」が、「ふるさと」からあふれているように感じました。本当の意味で子どもが「ふるさと」を実感するのは、その地を離れてからでしょう。だからこそ、「ぼくのわたしの笑顔あふれるふるさと自慢」をテーマに、表現しようとするとき、子どもは普段は意識していない「ふるさと」のよさを自覚しているのだと考えます。

全附P連

# 絵画コンクール2017 ぼくのわたしの 笑顔あふれる ふるさと自慢 入賞作品

※学校名については略称とさせていただいております。

## 謙信公賞

岡山中　2年
長崎特別支援学校　中学部1年
熊本小　4年
広島小　4年
福岡教育福岡小　2年
広島小　1年
愛媛幼　年中
愛媛幼　年中
長崎幼　年中
岡山中　1年
愛媛中　1年
熊本小　3年
広島小　4年
鹿児島小　2年
お茶の水小　2年
長崎幼　年中
上越教育幼　年中
愛媛幼　年中
上越教育中　1年
和歌山中　2年
熊本小　4年
熊本小　4年
鹿児島小　3年
兵庫教育小　2年
滋賀幼　年長
熊本幼　年少
富山幼　年少
山口光小　6年
鹿児島小　5年
金沢小　6年
上越教育小　4年
茨城小　2年
上越教育幼　年少
神戸幼　年少
広島三原幼　年中

山梨小　1年
京都教育桃山小　1年
愛媛小　2年
お茶の水小　1年
愛媛小　6年
愛媛幼　年長
福岡教育幼　年少
広島三原小　3年
広島三原小　1年
大阪教育平野小　1年
岩手幼　年長
愛知教育名古屋小　5年

お茶の水小　3年
愛媛小　2年
愛媛小　4年
お茶の水小　2年
鳴門教育小　3年
静岡静岡小　1年

## カンガルー賞

熊本小　1年
東京学芸小金井小　1年
茨城小　2年
熊本小　2年
愛媛幼　年中
熊本小　4年
広島小　5年
宮崎小　1年
愛媛小　1年
熊本幼　年中
お茶の水小　4年
上越教育小　6年
茨城小　5年
京都教育桃山小　2年
大阪教育平野小　1年
金沢幼　年長
熊本小　4年

## 会長賞

愛媛中
3年
瀬戸内海に臨むみかん山

熊本幼　年長
おじいちゃん、
湧き水って冷たいね

上越教育小　1年
山にいってカブト虫をつかまえるぞ！

茨城小　6年
茨城の自慢！ネモフィラの丘

山形小　4年
みんなで楽しいいもに会

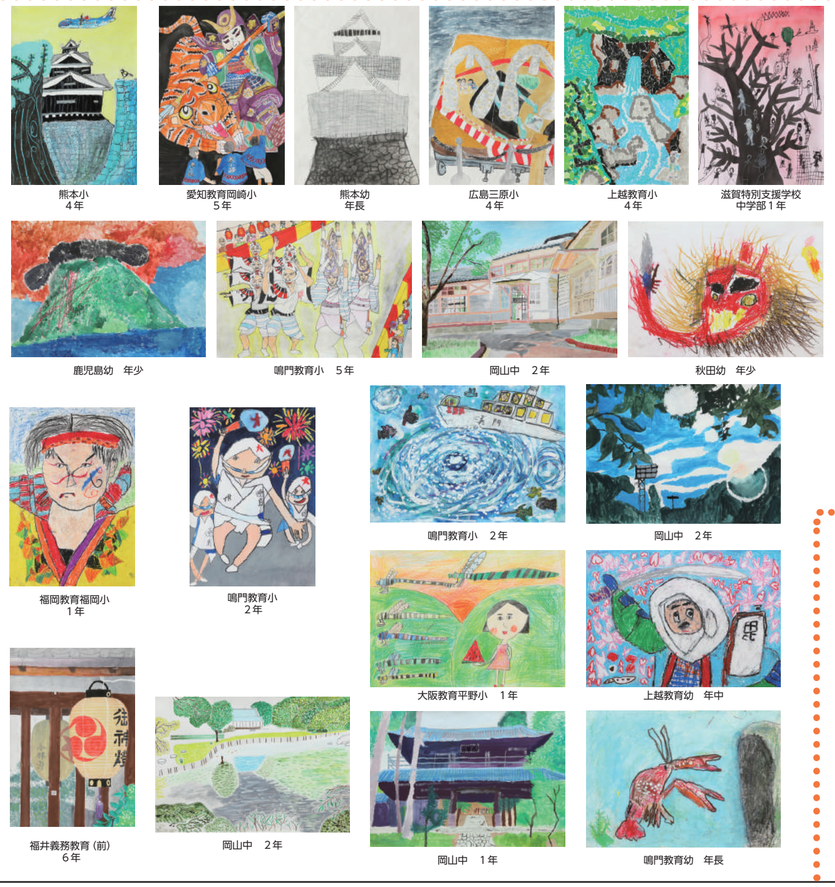
群馬特別支援学校　高等部1年
ぼくの大好きな赤城山

## 特別賞

上越教育小
5年
伝統の直江津祇園祭

茨城小
3年
私の大好きな水戸芸術館と朝顔

## 日比野克彦賞



熊本小
4年
愛知教育岡崎小
5年
熊本幼
年長
広島三原小
4年
上越教育小
4年
滋賀特別支援学校
中学部1年
鹿児島幼　年少
鳴門教育小　5年
岡山中　2年
秋田幼　年少
福岡教育福岡小
1年
鳴門教育小
2年
鳴門教育小　2年
岡山中　2年
大阪教育平野小　1年
上越教育幼　年中
岡山中　1年
鳴門教育幼　年長
福井義務教育（前）
6年
岡山中　2年

＊今回は日比野克彦氏が所用の為参加できず、代理として妹様である日比野光希子氏に特別審査員をお願いしました。

上越教育幼
年中
上越教育幼
年少

富山幼　年中
愛媛小　3年
東京学芸特別支援学校　中学部1年
鳴門教育小　3年
愛媛中　1年
熊本小　3年
鹿児島中　2年
福岡教育福岡小　3年
岡山中　2年
群馬幼　年中
滋賀小　1年
群馬幼　年長
大阪教育平野小　1年
岡山幼　年長



香川高松小
4年
長崎幼
年中

## 学校園優秀賞

長崎大学教育学部附属幼稚園
広島大学附属三原小学校
上越教育大学附属小学校
福岡教育大学附属福岡小学校
岡山大学教育学部附属中学校
東京学芸大学附属特別支援学校

福岡教育小倉小　2年
お父さんといねかり

茨城中　1年
自然豊かな茨城県フラワーパーク

長崎特別支援学校　小学部5年
平和のシンボル祈りの笑顔

長崎幼　年中
だいすきなうみ！！

## 描きたい気持ち

寄稿

絵を描くことは想像することの礎です。何を描くか、どの様に描くかよりも、描きたい！という気持が沸き起こる瞬間が大切です。絵画コンクールでその瞬間を描いた作者らと共有できることがなによりの楽しみです。

特別審査員
**日比野 克彦 氏**

**プロフィール**
1958年岐阜県生まれ。1984年東京藝術大学美術研究科大学院修了。1996ベネチアビエンナーレ参加。2015年芸術選奨芸術振興部門文部科学大臣賞受賞。2020東京オリンピック文化プログラムTURNを監修。現在、東京藝術大学美術学部長、先端芸術表現科教授。岐阜県美術館館長。

今回は参加できませんでしたが、来年は、また子どもたちの作品と出会えることを楽しみにしております。

## インタビュー　自分の「思い」を大切に

**Q．応募作品の印象をお聞かせください**

日本全国、この地方にはこんな風景があって子どもたちはここを見てるんだと、いろんな世界を楽しませてもらいました。

**Q．選考基準を教えてください**

自分自身の思いを子どもの視点で書いてあると、作品が魅力的に光って、自然と目に止まります。

**Q．今後の子どもたちに望むことは？**

今、情報網は色々あるが、自分の目で見たものを心に刻む風景で持っているような人になって欲しい。自分がどう思い何を感じたかを大事に毎日過ごして欲しいですね。

（インタビュアー　三浦　享）

特別審査員（代理）
**日比野 光希子 氏**

**プロフィール**
多摩美術大学GD専攻卒業。東京藝術大学大学院美術研究科修了。絵画だけでなく、家具、装丁、題字、陶芸、舞台美術などの分野でも活躍中。

# チームで仕事をする原体験

文部科学省高等教育局学生・留学生課
法規係 行政実務研修生（国立大学法人東京学芸大学総務部人事課人事係）
丹呉 綾子様

こんにちは。私は新潟大学教育学部附属新潟小・中学校の卒業生で、東京学芸大学の事務職員の丹呉綾子と申します。現在は文部科学省で行政実務研修を行っており、本年9月までの1年半は、文部科学省高等教育局大学振興課教員養成企画室に在籍し、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」の事務を担当しておりました。現在の附属学校に寄せられる厳しい目とそれ以上の期待を目の当たりにして、附属学校を有する大学の職員として身の引き締まる思いでした。

さて、「附属だより」への寄稿にあたり、自らの附属学校での生活を振り返ると、最も印象に残っているのは、附属新潟中学校での演劇発表会でした。演劇発表会は、監督、キャスト、脚本、照明、音響、メイク、大道具、小道具等の役割を生徒が分担して1つの作品を作り上げる行事です。私は3年生の演劇発表会で、重松清原作の「エイジ」を題材として、総監督を務めました。最終的には大成功であったと記憶していますが、予算と時間の制約がある中で、様々な立場の意見を調整することの難しさを痛感した行事でもありました。

演劇発表会をはじめとした附属学校での経験が、今、チームで仕事をすることの原体験になっていると感じます。自分の信念を持ち、ゴールをイメージしながら多くの人と一緒に物事に取り組んだ経験は、それぞれ異なる事情を抱える全国の大学と協力しつつ大きな目標に向けてくじけずに仕事を続ける糧になっています。

附属学校での経験は、社会人になっても生きる場面がたくさんあります。ぜひ、附属学校に通っているという環境を大切にしながら、充実した日々を過ごしていただきたいと思います。また、附属学校は多くの応援団に支えられているということも頭の片隅に置いていただけると幸いです。

最後に、このような機会を設けてくださった全附P連の皆様に感謝を申し上げ、私からのメッセージとさせていただきます。

# 内なる力を育む

松本市教育委員会　教育長
赤羽　郁夫様

本年10月6日、「北信越地区総会・実践活動協議会　松本大会」が開催され、大会主題を『附属学校園のあるべき姿を考える～地域教育の発展と地域に生きる附属学校園のあり方～』とし、充実した総会及び協議会が持たれました。

交流会に市長代理として出席した私は、挨拶の中で自身の附属学校園での経験の一端をお話ししましたが、その思いの一端をもう少しお伝えしたいと思います。

私は、信州大学教育学部の学生として附属松本小中学校で教育実習をしました。この時の指導教官や子どもたちとの出会いは、教師としての方向付けを決定的なものとしました。未熟な私を、指導教官や子どもたちはそのまま受け止め、共にあること、共に学ぼうとすることを後押ししてくれたのです。附属への憧れと感謝の思いを糧に念願の教職に就きました。

教職12年目、創立百周年の年に附属長野小学校に赴任した当時、「…児童の教育は、児童にたちかえり児童によって児童のうちに建設されなくてはならない。そとからではない、うちからである。…」という大正期に長野県師範学校附属小学校で行われていた研究学級の実践を基盤とした総合学習が展開されていたのです。

いかに効率よく教えるかなど教科の側からの実践を重ねてきたため私の戸惑いは大きく、子どもの側から、しかも『そとからではない、うちからである』の理念は大きな壁となったのです。そして「子どもの事実や具体から学び、子どもの内なる力を育む」教育実践に没頭したのですが、たやすいことではありませんでした。その時、私の大きな支えとなったのが、共に苦しんでいる同僚の実践や助言であり、いつも温かく励ましてくれたPTAの方々の存在でした。3年間の教育実践で私自身の教育観・子ども観が転換されたことは、その後の教師としての確固たる基盤となり、今でも私を私足らしめているのです。

今、教育改革の名の下で様々な施策が展開され、附属学校園も例外ではないとお聞きします。このような時だからこそ、確かな理念を掲げ、たくましく未来を生き抜くために子どもの『内なる力を育む』ために、教職員・PTA、そして子どもたちが一丸となって高みを目指した教育実践を自信と自負を持って重ねられることを心から願っています。

## Fuzoku OB houmon 附属OB訪問 Plus

国立大学附属学校卒業性・元教諭の皆様からご寄稿いただきました。

# ある先生のこと

内閣府政策統括官（共生社会政策担当）付参事官（子どもの貧困対策担当）付参事官補佐
髙橋 朋也様

先生に質問に行くというのは、生徒にとって非常に勇気のいることだと思います。私が初めて質問をするために職員室に伺ったのは、高校2年生のときでした。私の質問を聞いたときの先生の第一声が「それは、とても良い質問だ」だったこと、それを言われてとても嬉しかったことを、今でもよく覚えています。その先生――世界史の先生でした――は、私の質問に対し、広い時代的視野からスリリングな回答してくださり、それまで知らなかったことを知ることが、いかに自分の視野を啓き、自分の世界を広げてくれることか、また、それがいかに楽しいことかを学びました。

それから、私は何度も先生を訪れ、質問をしました。先生はいつも質問したこと以上のことを教えてくださり、そのたびに世界の見え方が変わりました。いつの間にか、質問に伺う先生は、世界史の先生だけでなく、様々な科目の先生に増えていきました。

あの日以来、私は、勉強することが好きになりました。今でも仕事に関係ある・なしに関わらず、勉強を続けています。その楽しみを教えてくださった高校の世界史の先生には、どんなに感謝してもしすぎることはありません。

私は、幼稚園から高校まで、附属学校に通わせていただきました。呉本・全附P連会長によると、こういう人のことを「スーパー附属」と呼ぶのだそうです。附属学校の先生方は皆、大変熱心に教育してくださいますが、スーパー附属の「スーパー」さは、その熱心な教育を幼稚園から一貫して受け続けることが出来たという幸運を指すのだと思います。今振り返ってみても、大変恵まれた環境だったと思います。また、PTAの皆様が生徒たちを、これほど熱意をもってサポートしてくださっていることを知り、改めて感謝の気持ちを強くしています。

附属学校は、熱心な方々で溢れた、とても恵まれた環境です。私のようにその熱心な方々から薫陶を受けた方も少なくないでしょう。このような環境があることは、この社会の大きな財産だと思います。

# 附属学校における チャレンジ精神の醸成

財務省関税局関税課
課長補佐
森下　雄平様

大阪教育大学附属幼稚園・附属平野小99期・附属高校平野校舎31期卒業の森下雄平と申します。大学で京都に出るまで平野で育ったため、附属学校での素晴らしい思い出はたくさんありますが、中でも中学時代の思い出としては生徒会長を務めたこと、高校時代の思い出としては文武両道をモットーに毎日練習に励んだ部活動が感慨深いものとなっています。

大学卒業後、私は財務省に入省し、現在、関税局で勤務しております。これまで、理財局、大臣官房IMF世銀総会準備事務局、外務省(大使館)で勤務し、様々な経験を積んでまいりました。新しい環境で多くの難題を解決するためには、常にチャレンジ精神を持つことが大切だと思っています。失敗を恐れずチャレンジするためには、成功確率を少しでも高めることができるよう、身近にいる人からのアドバイスだけではなく、色々な人の話を聞いてアンテナを高くして生きていくことが大切です。

在校生の皆さんも、何でもチャレンジしてみてください。周りから無理だと言われたとしても、やってやろうという気概を持って諦めずに挑戦すれば必ず道は開けます。中途半端に努力しても意味はありませんが、全力で努力すれば必ず報われます。学生の間は希望と未来に満ち溢れている反面、どうしても家庭環境や学校に生活水準が依拠する場合が多いのですが、附属学校が非常に恵まれた環境であるからこそ、その環境に安住してほしくないと思います。新しいことにチャレンジしましょう。ただし、今何にチャレンジすればいいかわからない方は、とりあえず学生の間は勉強しましょう。勉強して分からなかったことを知ろうとしましょう。勉強だけは裏切りません。

話は変わりますが、財務省では財政教育プログラムを推進しています。本プログラムでは全附連学校連盟、PTA連合会の皆様と連携させていただいており、財政に関する基礎を教育すると同時に、日本の財政状況を知り、財源確保や予算配分の問題にどのように取り組むべきか、生徒自身の将来に関わる問題として日本の未来を考えることができます。附属学校は全国に先立って本プログラムの開発に参画し授業で実践しており、OBとして光栄に思います。末筆ながら、今後とも変わらぬご厚誼とご指導を賜りますようお願い申し上げます。

# メッセージ　まず足元を見直そう

## 伝える工夫が必要

私は附属学校の出身者ではありませんが、同僚や知人に出身者がいます。一言で言えば、発想が柔軟で他人のことを考える余裕がある、という印象を持っています。最近、中学生の作文審査のお手伝いをしたことから、附属学校出身者の背景の一端を知ることができました。文章にはその人の人柄や考えが反映されます。個人差はありますが、自分の考えを文章化することは、修練が必要です。

附属ならではの取組み ： 財務省と共同開発した「財政教育プログラム」の一例（中３社会科公民授業）

附属学校の生徒たちの文章は、自分の体験やそれを通じた考えたことが、よくまとまっていました。それだけでなく、その時の情景や自分の心情も丁寧に描かれていたことに、感銘を受けました。最近の子供は作文が苦手です。子供だけではありません。大学生の作文を添削していますが、文章が書けない学生が多いことに驚きます。これでは中学生の方がよほど上手だと思うことがしばしばです。附属学校の生徒たちの表現力は、どうやって培われてきたのでしょう。中学生になって突然、作文力が向上したというより、小学校時代からの積み重ねがあったからだと思います。自分の考えを素直に出し、また、客観的に自分や家族、友人らを観察できるのは、単に文章を練習しただけではないと推察されます。小学校から、場合によっては幼稚園からの一貫した教育環境の中で、先生から個性を引き出してもらった成果ではないでしょうか。

作文を通じて、どのような学校生活を送っているのか。何に興味を持ち、体験したことに、どう反応しているのかが伝わってきます。公立学校や私立学校でも熱心な先生の指導で、面白い作品はあるのですが、附属学校の作文からは個々人の人格や独自性が色濃く出ています。先生が一人一人の個性を大事にし、成長に合わせた適切なアドバイスがあったのでしょう。長期間にわたる教育の大事さを感じました。

今、附属学校の存在意義が厳しく問われています。文部科学省による「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」が開催され、８月に報告書が提出されました。公私立とは異なる国立大学附属学校としての存在意義・役割・特色化の明確化が求められています。入学者選考の見直しや公立では実施しにくい取り組みを積極的に実施したり、保護者や地域住民に広く門戸を開いた学校にしたりすることが求められています。

附属学校については、入学選考で優秀な子供を集めて教育するため、公立のモデルにはならないとか、入学選考自体が「お受験」化して過度の競争を生んでいるとの批判は根強くあることは事実です。また、「お受験」のための塾などに入るためには、ある程度収入に余裕がなければならず、そのことも批判に拍車をかけている面は否定できません。

冒頭に紹介したように、附属学校の良さがたくさんあることは、保護者や先生が一番ご存知でしょう。門外漢の私ですが、「この国の未来のために～附属学校の魅力と存在意義～」を読んで、改めて附属学校の重要性を知りました。筑波大学附属大塚特別支援学校は、創立は明治４１年（１９０８）にさかのぼり、歴史があるだけではなく、現在も先進的な知的障害教育の拠点となっています。卒業後も３年間アフターケアとして居住地域や職場を巡回してサポートされています。東京学芸大附属特別支援学校では、みずほフィナンシャルグループと「金融教育」の共同研究を行なっています。生徒が社会で生きるために必要な金融に対する知識を身につけ、自立して生きていける教育を実施しています。

お茶の水女子大学附属小学校は、当たり前だと思われていることを、改めて問い直す哲学教育の発想を生かした「てつがく」科の授業を通じて、子供たちの対話や思考力を深める試みをしています。大阪教育大学附属高等学校平野校舎では、各方面の専門家を招いた「いのち」を考える授業や地域活性化プランを生徒が提案するなどの授業を行なっています。国際化の時代を象徴しているのが、鹿児島大学教育学部附属中学校です。同学部と国立台北教育大学が学術協定を結んでいることを活かし、２０１４年度から台北教育大から教育実習生を受け入れており、２０１３年度から台湾の大直高級中学と姉妹校提携を結んで、ＩＣＴ機器を活用して台湾の生徒と英語授業を通じて遠隔交流を行なっています。

こうした事例はほんの一部でしょうが、恥ずかしながら私は知りませんでした。多分、多くの国民も知らないでしょう。世間一般の批判的な意見がクローズアップされていますが、直接の関係者である保護者、学校関係者もどれだけ附属学校の良さを認識しているのでしょうか。あまりにも近すぎて、空気のように自然なものだと思っておられるから、その重要性を気にかけていないということもあるのではないでしょうか。

国や地域社会を支えていく人材を育てていく教育は、これまでも重要でしたが、これから先、国際化に伴う厳しい競争、少子高齢化社会の中で、より一層重要になってきました。教育の中で変える必要のない、守っていくべき理念や良さがある一方、社会の変化の中で新たに取り組む課題が増えています。全ての公立学校が取り入れる前に、試行錯誤して改善していく仕組みが必要です。ここにこそ、附属学校の使命があります。公教育のモデルとなる先駆的な取り組みについては、附属学校は伝統と確立したノウハウを持っています。これを広く伝えていくことこそ、附属学校の存在意義であるし、社会への大きな貢献になるはずです。

世間に対して、附属学校の良さを伝えて、偏見を是正していくためには、まずは足元から見直して、その重要性を把握していくことが必要です。それぞれの附属学校が長年培ってきた教育の良さをしっかり、他者にも伝えていくための前提となります。

また、伝えるためには、少し工夫が必要になってきます。初めから世間の人全部に理解してもらおうと考えてもうまくいきません。自分の子供の教育に悩んでいる人など、問題に関心を持ってくれる人に対し共感してもらえるように、課題や事例を示していくことは、大変有効だと思います。附属学校での知見を参考にしてもらえることで、ファンを増やしていくことになるからです。すぐに理解して賛同していただけなくても、将来、ヒントになることもあると思います。情報を発信する側の謙虚な姿勢で、粘り強く、語り続けることで賛同者を増やしていくことができるはずです。

各学校で取り組んできた事例や授業の内容のポイントを分かり易く示すこと、「見える化」して誰でも参考にできるようにしたら、多くの公私立学校の生きた教材になるでしょう。附属学校のネットワークを活用して、個々の事例の共通項を見出して、違った環境でも応用できるポイントを指摘することは可能です。インターネットを通じて発信していくなど、広く伝わるシステムが求められます。ネットだけでなく、各地域に古くからある附属学校は、人材を輩出してきました。そのネットワークを活用することも大切なことです。地域に開かれた学校として、地域の明日を支えていく人材を育てていく使命は、これまで以上に増してきていると思います。

今年９月２９日と３０日に開催された全附Ｐ連ＰＴＡ研修会全国大会に参加しましたが、約１０００人の保護者、先生らが全国から集まってこられ、熱心な討議を重ねられている現場に接し、改めて附属学校を支えている方々の情熱を肌で感じることができました。自分の子供たちや通っている学校だけでなく、附属学校が担っている公教育の大切さを切実に感じ、真摯に現代の教育の問題点を学ぼうという姿勢に頭が下がりました。

附属学校の良さを伝え、そのノウハウを活用して教育の新たなフロンティアを開拓し、広めていくことが改めて必要だと思いました。附属学校の存在意義をしっかりと認識して、世の中に貢献していく作業はこれからが本番です。部外者ですが、附属学校の応援団としてエールを送っていきたいと思います。

## 知ってほしい　附属学校の良さ

ジャーナリスト　斎藤　治氏（元読売新聞主任研究員）

---

さいとう　おさむ　１９５４年９月、青森県弘前市出身。慶應義塾大学商学部を卒業後、１９７９年読売新聞大阪本社に入社。広島支局、社会部、経済部次長、論説・調査研究室主任研究員などを経て、２０１４年退職。現在、フリーランスのジャーナリスト。

# 附属は有機農法

東京学芸大学附属高等学校のOBで脳科学者の茂木健一郎さんを訪問させて頂きました。小学５年生の頃にアインシュタインの伝記を読み、科学者を志したという茂木先生。フォロワーが144万人超というご自身のTwitterでの様々な分野に向けた発言には大きな影響力があります。今、国立大学附属学校のあり方が問われている中、附属OBとして、また附属学校の応援団として、和やかな雰囲気の中でお話を伺いました。

## 茂木　健一郎氏　対談　呉本会長

## 「地頭（じあたま）」の強さがカギ

呉本：茂木先生が数ある学校の中から東京学芸大学附属高校を志望された理由を教えて下さい。

茂木：一番の理由は学校に対するイメージでしたね。それは偏差値や進学率などの数字に現れないもの。

実際は進学校なんだけれど、「勉強！勉強！」ではなく非常にのびのびした自由な校風であるという評判で志望しましたね。そして、入学した時にすごく印象に残っているのが、校長先生から「君たちは実験台なんだよ！」って言われたことですね。（笑）

呉本：先日、ある国立大学附属高校の先生から「大学受験を意識した教育ではなく、目の前の子ども達の興味や才能をいかに伸ばすかを考えている。進学率は結果的についてくるものくらいにしか考えていない。」というお話を聞きました。東京学芸大学附属高校もその様な校風だったのでしょうか。

茂木：学芸でも受験に関係のない授業が多かったように思います。でも、おかげで知識の多寡でなく論理的思考力やコミュニケーション能力などという「地頭」（じあたま）がつくられて、その結果、受験に役立ったと思います。

受験のためだけではない「地頭」をつくること、言い換えれば「促成栽培」ではなく腐葉土で「有機栽培」をする。それが国立大学附属学校の役割ではないでしょうか。

近年になって国はアクティブラーニング（能動的学習）や探求学習を強調し始めていますが、実は附属学校ではずっと前からそれを実践していました。

世間一般のイメージにある「エリート教育」ではなく、偏差値とはまったく違う尺度での「エリート教育」がなされてきたのが国立大学附属学校だと思います。

呉本：そういう意味では、幼稚園から高校までの教育は「地頭」をつくることに重要な時期であり、国立大学附属学校の役割のひとつはその実践にあるのでしょうね。

茂木：世界的に評価の高いハーバード大学やケンブリッジ大学の教授がよく言うのは「大学へ入学した時点では、もう勝負がついている。本人たちが高校までにやってきたことが大学での学びの成果に大きく影響する。」ということ。

これからの時代、世界で活躍するであろう日本の子ども達は、やはり「世界で通用する学力・能力」を身に付けていないといけない。その教育の中心にあるのが国立大学附属学校だと思いますね。

そういった意味で、国が教育のあり方を設計し直さないといけないこの時期に、その設計、研究と実践ができるのは国立大学附属学校しかない。一部にある「国立大学附属学校は教育全体に貢献しない」なんて論調はナンセンスですよ。

呉本：先の文部科学省の「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する有識者会議」においても、国立大学附属学校のあり方が議論される中、「国立大学附属学校不要論」も出ました。

茂木：国立大学附属学校批判は突き詰めると個性の伸ばし方に対する見方の問題。地域性も教育の機会の平等も大事だが、教育に多様性や個性、校風が存在するのは、将来の国の強さを高めるものだと思います。平等というのは全国すべての学校を画一的にすることではない。やはり国を強くするためには「エリート」は必要。でもそれは偏差値で判断されたエリートではなくて、国立大学附属学校の様に偏差値では測れない様々な個性を持った「地頭」の強い子どもを育てることが重要だと思いますね。ＡＩなど新しい技術の急速な発展で、今、日本は明治維新以来の大きな転換期を迎えようとしています。これからは世界が求める学力観が違ってくるはず。その中で国立大学附属学校の役割は増えようとも、減ることはないと思います。

日本の教育のハブとして、国立大学附属学校を今こそ活かし、地域の教育委員会、公立校、先生方を巻き込んでネットワーク化すべきです。

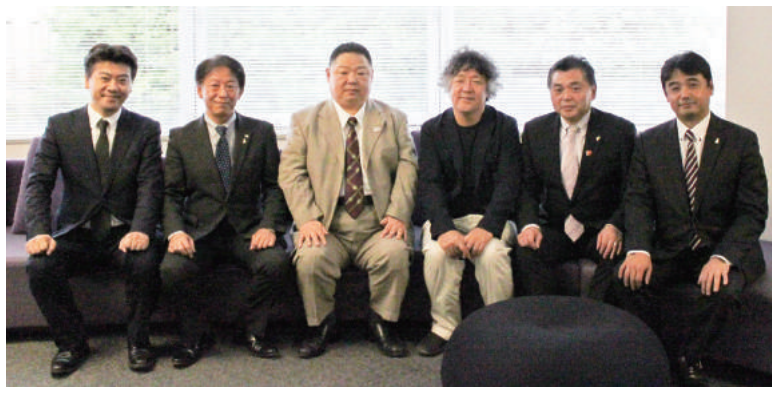
そういった観点から、国立大学附属学校には教員養成に始まり教育法や学習法を研究開発するという重要な役割があること、また、その成果が全国津々浦々それぞれの学校へ広がっていくことで、日本の将来を担う子ども達の教育が充実すること、この部分を広くアピールすることが重要であると思います。

呉本：最後に、全国の国立大学附属学校に通う子ども達、教職員、保護者へメッセージをお願いします。

茂木：国立大学附属学校に通うみなさんへのメッセージは「個性を伸ばして下さい」ということにつきます。脳の中にはミラーニューロンという細胞があって、他人という鏡に映る自分の姿を通して自分の個性がわかるというもの。だから個性を大事にするということは友達を大事にすることです。どうか友達を大事にして個性を伸ばして下さい。

国立大学附属学校の保護者は学校に対するサポートが強力であると思います。そのお陰で教育環境も整備され、子ども達も安心して学べていますよね。色々と大変なこともあるかと思いますが、これからも保護者と教職員のみなさんが強力に連携して頑張っていただきたいと思います。

（文責：北島一人）



脳科学者

**茂木　健一郎氏**

（東京学芸大学附属高等学校卒）

**プロフィール**

もぎ　けんいちろう
脳科学者、作家、ブロードキャスター。ソニーコンピュータサイエンス研究所シニアリサーチャー。東京大学、大阪大学、日本女子大学非常勤講師。
1962年10月20日東京生まれ。東京大学理学部、法学部卒業後、東京大学大学院理学系研究科物理学専攻課程修了。理学博士。理化学研究所、ケンブリッジ大学を経て現職。専門は脳科学、認知科学。「クオリア」（感覚の持つ質感）をキーワードとして脳と心の関係を研究するとともに、文芸評論、美術評論にも取り組んでいる。2005年、『脳と仮想』で、第四回小林秀雄賞を受賞。2009年、『今、ここからすべての場所へ』で第12回桑原武夫学芸賞を受賞。

附属OB訪問　第9回

寄稿

国立大学法人
信州大学　学長
濱田 州博 氏

# 附属学校園の生徒と接して

信州大学教育学部には、6つの附属学校園があります。長野市にある附属長野中学校、附属長野小学校、附属特別支援学校と、松本市にある附属松本中学校、附属松本小学校、附属幼稚園です。これには、長野県の歴史が関係しており、特に、師範学校時代からの複雑な事情が絡んでおります。また、信州大学自身が典型的なキャンパス分散型大学であり、長野市、松本市、上田市、南箕輪村の4市村に5つのキャンパスを有していることとも関係しております。教育学部がある長野市と本部がある松本市に附属学校園が立地しております。

さて、私自身は、平成27年10月より学長を仰せつかっており、附属学校園との接触はその時からですので、まだ2年あまりしか接触はありません。短い期間ではありますが、この間附属学校園に出向いて行ってきたことを紹介させていただきたいと思います。

最初に出向いたのは附属松本小学校で、授業を見学させていただき、給食を一緒に食べました。これは、自分自身の持つ給食のイメージが自分の子どもの頃のイメージしかなく、今の給食を知りたいという私のリクエストに応えていただいたものです。想像していたとおり昔に比べて格段においしい印象を受けました。また、給食の時に前と隣の児童と結構お話しすることができ、小学生との会話を楽しむことができました。

附属松本中学校に関しては、昨年創立70周年を迎えたこともあり、年に1度行われる附中祭の中で「21世紀をリードする地球市民に期待すること」と題して講演させていただきました。最初に自分が生まれてから成長過程であった出来事、東京・札幌オリンピックや大阪の万国博覧会等についてお話しさせていただいた後、3つのことについて提言をさせていただきました。1．環境変化にどう対応するか（気温や気象変化、自然災害等に対して）、2．エネルギー供給をどうするか（石油依存からの脱却は可能か）、3．メディア・通信の変化にどう対応するか（新聞・テレビの時代からスマホの時代へ）です。字数の関係で詳細は省略しますが、最後に「時代を振り返り未来を考える」ことの重要性を述べさせていただきました。講演の後、あるクラスの生徒全員が関心のある提言を選んで意見を作文にしてくれましたが、深く考えている意見もあり、中学生の考えの一端が理解できた次第です。

附属松本中学校の授業にも参加させていただきました。県民満足度と観光客アップ、中学校の長期休暇、教育、交通の安全と利便性、公共交通機関、長野県の雇用に関して、グループで発表してもらい、それに対して意見交換する形で行いました。かなり詳細な調査がなされており、自分たちの意見も盛り込んだ発表で、中学生もここまで考えているのかと感心させられました。今大学でも進められているアクティブ・ラーニングそのものでした。

附属松本中学校の授業で

以上、私自身が参加させていただいた行事を中心に紹介しましたが、運動会や公開研究会にも参加させていただいております。ただどうしても私の勤務地である松本の附属学校園が中心で、長野の附属学校には一度しか出かけておりません。来年は長野にも出かけたいと思っております。また、年に一度PTAの方が開催する「学長を囲む会」で意見交換をさせていただいております。

ところで、現在、教員養成大学、学部、大学院、附属学校園を取り巻く状況はかなり厳しく、有識者会議による改革に関する報告書が出されています。附属学校園に関しては、存在意義・役割・特色の明確化が謳われております。それぞれの地域で長い歴史を持ち、特色的な教育を行ってきたのが、附属学校園だと思います。今後とも先進的な取組と共に、地域に根を張った教育の展開を期待しております。

---

障がいを知り共に生きる～「あいサポート運動」が一気に全国へ！

# 鳥取県と全附P連が連携協定を締結

9月29日、全附P連は鳥取県と「あいサポート運動」推進のための連携協定を、任意団体としては全国ではじめて締結いたしました。これにより、全国の国立大学附属学校の子ども達やPTAを中心に、自治体の境界を越えて各都道府県で「あいサポート運動」を推進していくことが可能になりました。

「あいサポート運動」は平成21年11月に鳥取県で創設された運動で、障がいのある方への必要な配慮などを理解して、日常生活においてちょっとした配慮や手助けを実践していく『あいサポーター』の活動を通じて、誰もが暮らしやすい地域共生社会を皆で一緒につくっていく運動です。

「あいサポート運動」は創設以来、多くの方々の賛同を得てその輪が各地に広がっており、現在のところ鳥取県、島根県、広島県、長野県、奈良県、山口県、岡山県、和歌山県の8県に及んでいます。

「あいサポート研修」を受けることによって誰でも『あいサポーター』になり、運動を行うことができます。

## 今までにはなかった、子ども向けプログラムの開発と実施が可能に！

「あいサポート研修」はおもに企業などの社員研修や大人向けのものが多く、そのカリキュラム内容が小・中学生など子ども達には指導しづらいものでした。全国の国立大学とその附属学校の持つリソースを活用することで、子ども達の年代や成長に合ったプログラムの実施や教材の研究・開発が可能になります。

多様な障がいの特性や障がいのある方への配慮を正しく理解することは、共生社会の実現へ向けたインクルーシブ教育推進のための第一歩となります。

今年度は各地区1校園をめどに、『あいメッセンジャー（講師）』派遣などに必要な費用を全附P連で負担いたします。ぜひ、この機会に「あいサポート研修」授業実施を希望していただきますよう、よろしくお願い致します。実施を希望される学校園・PTAは、全附連事務局までお申し込みください。

（竹川裕之）

**「あいサポート研修」授業 実施校募集！**

和歌山中「あいサポート研修」授業

---

いじめ防止プログラム

香川坂出小　いじめ防止プログラム

# PTAのいじめ防止活動は必須

全附P連では、昨年度の附属学校でのいじめの問題を受けて、PTAが主体となるいじめ防止に関する事業を全国的にも広めていこうとしています。現在のいじめの対応は、学校側が主体となっているものがほとんどだと思います。しかし、少しでもいじめ防止に役立つようなPTA主体の活動も考えられると思います。いじめの重大事案が発生した時、PTAは、学校側や一部の保護者を批判するのではなく、PTAが傍観者になってしまい対策ができなかったことを反省するべきだと思います。ささやかなことでも結構ですので、いじめ防止に関する活動をPTAが主体となって実践するようよろしくお願いいたします。

さて、本年度はいじめ対策活動助成金を新設し、前号の附属だよりで紹介された香川大学教育学部附属坂出小学校のいじめ防止プログラムを皮切りに、16件の助成金申請事業が実施されます。12月には、静岡大学教育学部附属浜松中学校で、全国大会の基調講演をしていただいた阪根先生と全附P連が協力したいじめ防止プログラムが開催されます。内容もどんどん充実してきています。いじめに苦しむ子どもたちがいなくなるように、みんなで努力していきましょう。

（神余智夫）

# 設立 全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会

設立議案可決の様子

教育後援会連絡協議会の設立総会が、9月29日、全国大会に先立って開催されました。まず、設立趣意に基づき、設立について採決が行われ、賛成多数によって設立が可決されました。

## 始動した全国連携

そして、当初会員67校の教育後援会により、会則と理事が承認されました。

その後暫時休憩となり、その間に第1回の理事会が開かれ、再開後の総会で会長副会長の報告があり、監事の承認も行われました。

次に、予算案、事業計画などが承認され組織が正式にスタートしました。久保理事長から、まずは委任経理の見直しなど、コンプライアンスのあり方を全国発信していきたいとの説明があり、全国の附属学校にとって心強い支えとなっていく期待が膨らみました。

（神余智夫）

以下役員（敬称略）理事長：久保眞司（宮崎小）、副理事長：小出克元（香川高松）・井上恒治（全附P連）、理事：林巧（北海道教育札幌小）・幡谷公朗（茨城幼）・大嶽達哉（愛知教育名古屋中）、寺本俊彦（滋賀）、勢島淳生（福岡教育小倉中）、監事：村重嘉文（お茶の水中）・大倉宏治（全附P連）

## 設立趣意

全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会　設立趣意（抜粋）
教育後援会連絡協議会設立準備会

（一部省略）教育後援会組織を持つ全国の附属学校では、この後援会活動が学校経営支援、就学環境改善に大きく寄与していることは言うまでもありません。全附連におきましても、教育後援会の役割は極めて重要と位置付けております。さらに近年活発化する全国規模の情報共有・連携活動は、今後、附属学校の経営基盤強化、地域連携促進の大きな力に成りうると期待されています。

（一部省略）各地教育後援会という組織の運営方法や法令との整合性などにかなりの相違が見られ、場合によっては内外に支障をきたす恐れも否めない事例が存在することも明らかになりました。これらさまざまな事例を持ち寄り、情報を共有することは、これまでの年１回の会長会だけでは難しく、組織そのものの法的根拠や後援会活動の有意義性をさらに全国レベルで標準化するには、それぞれの教育後援会を連携する組織体と継続的活動基盤が必要不可欠であると考えます。

（一部省略）今、この附属学校が国家の歳出削減に重きを置いた有用性の観点から、徐々に存置の危機にさらされていく状況にある中、時代に応じて、さらに公共性を高めるべく改革すべきところは真摯に改革しつつ、この国の未来のために公教育の根幹を支え続けることが肝要であり、それらの改革を実施しようとする附属学校をＰＴＡとともに、それらを支援するというスタンスのもと教育後援会が後ろ盾となり、地域とともに相互に支えあう連携が必要であると考えます。さらには、これからの新しい附属学校のあり方を全国的な視野で考察、研究することも必要かもしれません。

結びに、当会は附属学校に通う子どもたちの現役の保護者をそのステークホルダーとして全国国立大学附属学校ＰＴＡ連合会、さらには全国国立大学附属学校連盟を支援し、縁の下の力持ちとして常に同一路線をともに歩む組織であることを揺るぎのない事実として確認し、以上にご賛同いただける各附属学校教育後援会による、全国国立大学附属学校教育後援会連絡協議会を設立することを本文の趣意とさせていただきます。

# 共生社会実現の為

## カンガルーシップ活動

本年度も多くの附属学校園よりカンガルーシップ助成金にご応募いただき、感謝申し上げます。

カンガルーシップ活動助成金って何？他校園はどんな事やってるの？と思った読者の皆様、全附連ホームページ『平成28年度カンガルーシップ活動助成金報告書』をご閲覧ください。各校園からの活動報告はきっと参考になると思います。年度内で事業をやってみたいが、その準備に単位ＰＴＡ内での同意取り付け・根回し・調整等の時間が不足し実現できない事例があると想像します。普段より仲間内での会話・理事会等で次年度又は複数年度の事業としてやりたい事を話し合ってはいかがでしょうか？

今後ともインクルーシブ社会実現の為、カンガルーシップ活動助成金をご活用下さい。

（雪岡雅）

# ご案内 全附Ｐ連PTA研修会 第９回全国大会

## 日程：平成30年９月28日㈮～29日㈯
## 場所：ハイアットリージェンシー東京

全国各地より約860名のご登録をいただき、ご来賓、講師の先生方、スタッフを含めると約1000人の皆様に参加いただいた全附Ｐ連ＰＴＡ研修会第８回全国大会もお陰様で無事終了することができました。参加者・ご来賓・関係者の皆様に心より感謝申し上げます。現在、今回の大会参加者の皆様から直接お聞きした意見・感想やアンケートの意見・集計結果などの貴重な情報を参考にして、第９回全国大会の企画の検討を進めております。参加者の皆様にとってより魅力的で参加しやすい大会になるよう、また多くの学びや気づきがあるプログラムを提供できるよう企画してまいりますので、来年も是非多くの保護者の皆様、先生方、そして教育後援会の皆様のご参加をお願い申し上げます。　（平岡昌純）

## 編集委員

**全附連**
委員長　堀内かおる　横浜国立横浜小
副委員長　関田義博　東京学芸小金井小
委員長　仲道嘉夫　東京工業科学技術高
委員　河村卓丸　横浜国立鎌倉小
委員　山田有希子　東京学芸附小竜園舎
委員　齊藤忠彦　宮城大郡山小中特支

**全附Ｐ連**
広報委員会担当副会長　竹川裕之　和歌山中
委員長　三浦　享　長崎小
副委員長　福居裕二　北海道教育旭川中
副委員長　北島一人　鳴門教育中

## 編集後記

◆９月中旬、絵画コンクール審査会。上越の地に過去最多の子どもたちの力作が集まった。審査の先生方が、日比野光希子先生が、作品たちと真剣に対峙する。選考する責任感がこちらにも伝わって来た。審査後は顔に笑顔が戻り、安堵の表情。上越の皆さんも、子どもたちの為に頑張った充実感からか会話も弾み、一気に距離が縮んだ気がした。

◆９月末、全国大会の前日準備日。明日から２日間、多くの参加者を迎えての全附Ｐ連の一大イベント。ただ前日は、展示・ＰＲブース等の設営、大会キットの袋詰め、会場や当日の進行確認等、やる事が山積みだ。スタッフ総出の準備が終った頃にはすっかり日も暮れていた。

そして大会当日、緊張の本番がスタート。内容の充実度は？粗相はないか？参加者の反応が気にかかる。進行するにつれ、一年間の計画が具現化していく充実感へと変わっていった。大会が終る頃には完全燃焼。本大会が少しでも各学校園のためになればと願うばかりだ。

◆10月末、附属ＯＢ訪問。茂木健一郎さんの教育愛・附属愛に感銘を受ける。この流れから、私所属の長崎附属小、そして全附Ｐ連にも講演に来て頂けそうだ。附属を大切に思う人とのご縁をこちらも大切にしていきたい。

◆呉本会長から「今回の附属だよりは12頁でいこう。皆様に伝えたいことがたくさんある。」と８頁から増量の提案。会長の附属や公教育を思う気持ち、視野の広さ・行動力にはいつも脱帽だ。

◆有識者会議や後援会全国組織など、近年大きな動きが多い中、記事の裏の小さな、でも熱い思いを伝えたくて、編集後記に記しました。いろんな人たちが全国の子どもたちのためにいろんな立場でできることをやっている。それを伝えたくて…。その他にも多くの方に寄稿を頂いたりと、内容充実の「附属だより第110号」です。

（三浦　享）


全国国立大学附属学校園の幼児・児童・生徒の保護者の皆様へ

この保険は全国国立大学附属学校PTA連合会の団体保険です。

平成２９年度 中途加入受付中

# カンガルー保険のご案内
（前こども総合保険）

ただ今募集中！
詳細につきましては、パンフレットをご覧ください。

**任意加入制度**

24時間補償

**約50％割引**
全国国立大学附属学校PTA連合会が窓口の団体契約なので、保険料が約50％割安です。
・団体割引：30％
・損害率による割引：25％適用

**24時間補償**
お子様を取り巻く様々なリスクに対応した安心のための24時間補償制度です。

**簡単・便利！**
・保険料のお支払は、便利な「口座振替方式」
・更新のお手続きは、便利な「自動更新」です。

保険期間　平成29年４月１日午後４時から平成30年４月１日午後４時まで１年間
※随時ご加入いただけます。（お申込日にかかわらず、補償は平成30年４月１日午後４時に終了します。）
※ご加入ご希望の方は、取扱代理店までお問い合わせください。

加入対象者　①全国国立大学附属学校園に在籍の幼児・児童・生徒
②本制度にご加入いただいた上記①の兄弟で、公・私立の幼稚園・小学校・中学校・高等学校・特別支援学校に通われている幼児・児童・生徒（ご加入時に満3歳以上から満18歳以下の方に限ります。）

加入手続き　パンフレット差込の加入依頼書にご記入・ご捺印（銀行届出印）のうえ、返信用封筒にてご返送ください。

申込締切日　随時ご加入いただけます。（お手続きの翌月１日（午後４時）からの補償開始となります。）
※パンフレットのご請求、保険料につきましては、取扱代理店までお問い合わせください。

【引受保険会社】（幹事保険会社）東京海上日動火災保険株式会社
（担当課）公務第二部文教公務室 〒102-8014 東京都千代田区三番町6−4　TEL:03−3515−4133　FAX:03−3515−4132
平成２９年５月作成 17-T01070

**全員加入制度**　※個人での加入はできません。

1 園児・児童・生徒、教職員の皆様のケガなどを補償する
**園児・児童・生徒・教職員総合補償制度**
（学校契約団体傷害保険、賠償責任保険PTA特約）

2 園児・児童・生徒、教職員の皆様を犯罪事故からお守りする
**犯罪被害事故見舞補償制度**
（傷害総合保険）

3 PTA活動に参加中のご両親・教職員の皆様のケガや賠償事故を補償する
**PTA活動総合補償制度**
（普通傷害保険PTA団体傷害特約、賠償責任保険PTA管理者特約、生産物特約）
熱中症危険補償特約を追加しました！

保険期間　平成29年６月１日午後４時から平成30年６月１日午後４時まで
※「カンガルー保険（全員加入制度）」は全国国立大学附属学校PTA連合会を保険契約者、損害保険ジャパン日本興亜株式会社を引受保険会社とし、学校契約団体傷害保険、傷害総合保険、PTA団体傷害保険、賠償責任保険（PTA特約、PTA管理者特約、生産物特約）をそれぞれ組み合わせて加入する補償制度のペットネームです。
※この広告は概要を説明したものとなります。詳細はパンフレットをご覧くださるか、取扱代理店または損保ジャパン日本興亜までお問い合わせください。

【引受保険会社】損害保険ジャパン日本興亜株式会社
団体・公務開発部 第三課　〒160-8338 東京都新宿区西新宿１-26-1　TEL:03−3349−9588　FAX:03−6388−0162
※損保ジャパンと日本興亜損保は、2014年9月1日に合併し、「損害保険ジャパン日本興亜株式会社」になりました。
SJNK17-01973

**カンガルー保険・取扱代理店のお問合せ先**
この広告はこども総合保険団体契約の概要についてご紹介したものです。ご加入にあたっては、必ず「重要事項説明書」をよくお読みください。ご不明な点等がある場合には、代理店までお問い合わせください。

《北海道・東北・関東・北信越・四国地区》
**株式会社 第一成和事務所**
東京都中央区日本橋久松町11-6
日本橋TSビル 8F
0120-100-492

《東海・近畿・中国・九州地区》
**海上商事 株式会社**
東京都渋谷区代々木2-11-15
新宿東京海上日動ビルディング
0120-745-748